

漱石を巡る闘争

「木曜会」共同体にみるホモソーシャルな関係性

京都大学大学院教育学研究科 椎名健人

1.目的 本報告の目的は、夏目漱石とその弟子たちによって構成されていた共同体「木曜会」についてその性質を「明治期日本の学生・知識人文化におけるホモソーシャル」という枠組みから考察することである。

2.方法 「木曜会」の成立期である 1906 年前後に初めて漱石宅を訪れ、学校という場の外で漱石とパーソナルな師弟関係を結んだ小宮豊隆や森田草平らの門弟は、後年に表した手記や回想録の中で、自らの漱石に対する熱烈な尊敬、崇拝の感情を、時に「アフェクション（愛情）」、「恋」といった言葉まで用いて表現している。このような漱石と弟子たちの関係性は、日本の知識人文化における雛形とも考えられる。本報告では彼ら「木曜会」成立期の漱石門弟たちによる共同体を「木曜会」共同体と位置づけ、この「木曜会」共同体と漱石との間に築かれた濃密な関係性について、イヴ・セジウィックの『男同士の絆 イギリス文学とホモソーシャルな欲望』（1985 年）を参照しながら分析する。その際、「ホモソーシャル」の重要な構成要件、すなわち「ミソジニー」と「ホモフォビア」を軸にしながら、これらの適用可能性について考える。

3.結果 分析の結果、まずミソジニー性については、小宮豊隆、森田草平ら「木曜会」共同体の成員が漱石の妻、鏡子に対して向ける非難と嫌悪(≒鏡子悪妻説)に着目することで明らかにした。ただし、そこにはセジウィックがミソジニー性の根拠とする「男同士の女性の交換」が存在しない。

また、ホモフォビアについては必ずしもセジウィックの論を単純に適用することはできない。「木曜会」共同体内部で時に疑似親子関係や師弟間の(肉体的な欲望を伴わない)「恋」といった形をとって表われる親密性からは、ホモセクシュアルとの断絶か連続かという二項対立だけでは説明しきれない、独特の関係性を見出すことができる。

4.考察 3の「結果」で述べた通り、「木曜会」共同体についてもホモソーシャルな絆は存在するものの、セジウィックの定義する「ホモソーシャル共同体」との間にはいくつかの差異が存在することが明らかになった。

報告ではこの差異について考察しながら、ホモソーシャル性という観点から見出される明治日本の知識人文化の特質について発表する。

5.文献

イヴ・K・セジウィック『男同士の絆 イギリス文学とホモソーシャルな欲望』上原早苗、亀澤美由紀 訳(名古屋大学出版会、2001 年)

小宮豊隆 『夏目漱石』(岩波文庫 1986-1987 年)

森田草平 『夏目漱石』(講談社学術文庫 1980 年)

他